HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	函館の水産科学館
Author(s)	持田, 誠
Description	総合博物館へ行こう. 第8回.
Citation	きぼうの虹, 330, 7-6
Issue Date	2010-09-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46744
Type	article
File Information	mochida kibou330.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

総合博物館へ行こう 第8回

函館の水産科学館

総合博物館
資料部研究員　持田　誠



写真1　函館キャンパスにある水産科学館本館（撮影：齋藤貴之）

水産資料館から水産科学館へ

北海道大学には、札幌キャンパスと函館キャンパスがある。札幌キャンパスに本拠を置く総合博物館には分館があり、それが函館キャンパスに設置されている水産科学館だ。もともと水産学部附属水産資料館だったものが、二〇〇七（平成一九）年、水産学部創基百周年を節目として、総合博物館分館水産科学館となった。

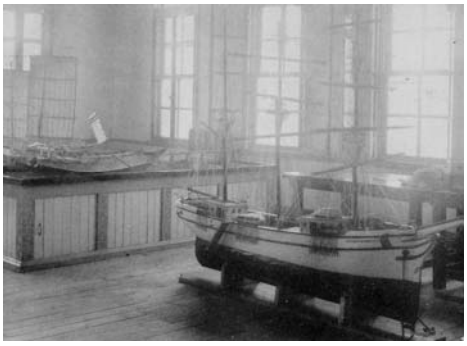


写真2　東北帝大農科大時代の水産講堂標本室内

水産科学館の歴史は、東北帝国大学農科大学水産学科時代に遡る。当時、水産学科は札幌キャンパスにあり、一九〇七（明治四〇）年には、今のクラーク会館と同窓生会館の間あたりに、水産講堂が建設された。ここに標本室が設置されていたことが源流となっている（写真2）。

激動の水産学部変遷史

北大水産学部の歴史は複雑だ。札幌農学校に水産学科が設置されたのが一九〇七（明治四十）年。わずか七ヶ月後には東北帝国大学農科大学水産学科へ改組。その後、北海道帝国大学水産専門部になるも一九三五（昭和十）年に廃止され、代わりに函館に「函館高等水産学校（函館高水）」という、北大とは別の組織が発足した。ところが一九四〇年、北海道帝国大学農学部に新たに水産学科が設置され、札幌キャンパスでの水産学研究が再び始まる。札幌の農学部と函館の高水という、二本立ての水産学研究拠点が存在した時代があったのである。

戦時中、函館高水は函館水産専門学校と名を変える。そして戦後の一九四九（昭和二四）年、新制北海道大学は、農学部水産学科と函館水産専門学校を統合し、新たに水産学部を函館に設置した。これが現在の水産学部、大学院水産科学研究院へとつながっている。

一九三五年創立の函館高水では、校舎の正面二階に標本室が設置された。これも水産科学館の系譜へ連なるものである。しかし時代はすぐに第二次世界大戦に突入。一九四五（昭和二〇）年の終戦で校舎は連合国軍（進駐軍）に接収され、標本や資料は教育研究資材と共に、現在の函館市東川小学校へ移転。さらにその後、市内谷地頭にあった旧帝国陸軍津軽要塞司令部倉庫へ移転。この間に保存資料は多数のものが破損・紛失などの甚大な被害を受けたという。戦争は博物館資料の保存にとっても、致命的な打撃を与えるのである。

おしょろ丸から海洋生物まで

北大水産学部と言って忘れてはならないのは練習船「おしょろ丸」である。現在のおしょろ丸は四代目で一九八三年就航。初代は一九〇九（明治四二）年就航「忍路丸」で帆船だった（写真3）。母港も函館ではなく、現在も臨海実験所が立つ小樽の忍路だった。北大の練習船はこの他にも、「うしお丸」（現役で活躍中）、「北星丸」（退役）、研究用潜水艇「くろしお号」（退役）がある。水産学の教育・研究には船が不可欠なことがわかる。



写真3　帆走する初代忍路丸

水産科学館には、こうした船に関する資料も収蔵されている。明治時代に購入された木造の和船模型をはじめ、図面や関連資料などが保存されており、全国の船に関する博物館のネットワーク「海と船の博物館ネットワーク」にも登録されている。

この他、漁業には欠かせない浮子（アバ・うきのこと）や漁網などの実物資料が多数収蔵されている（写真4）。これらは日本の産業史を考える上で重要な歴史資料であるが、残念ながら前述のような経緯もあり、資料台帳やラベルなどが失われてしまっていて、資料情報が判然としない。有効な活用のためには、もう一度、資料情報を再検討して台帳を整備する必要がある。そのためには資料専門員の配置や、研究者の受け入れ体制が必要だろう。

一方で、水産科学館に（6頁へ）



写真4　海洋生物標本が並ぶ現在の第一標本室

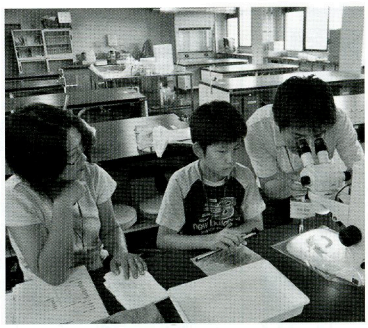


写真5　魚類パラタクソノミスト養成講座の開講（撮影：齋藤貴之）

（7頁より）は代々、魚類分類学の専門家が専任教員として就いている。そのため、水産資料だけでなく、魚類をはじめとした海洋生物の標本も多数集積されている。こうした標本を活かして、パラタクソノミスト養成講座や土曜サロンなども開催されており、函館キャンパスにおける社会教育拠点として発展中である（写真5）。

札幌キャンパスとは独自の歴史を有する水産学部、函館キャンパス。その歴史を豊富な資料や標本と共に克明に記録し、未来へ語り継いでいくと共に、水産科学の生きた研究拠点として、水産科学館はこれからも益々その力を発揮していくに違いない。

なお、水産学部の歴史や水産科学館については、二〇〇八年に開催された企画展「水産科学館に蓄積された水産学部100年の歴史」展の図録に詳細がある。興味のある方はご参照いただきたい。